

研究に使用した発電システムを視察する関係者 =雲仙市、旅館ゆのか



地熱研究 受け入れ相次ぐ

バイナリー発電稼働中小浜

未利用のまま排水されている温泉の熱を活用したバイナリー発電所が2013年4月に開所した雲仙市小浜町の小浜温泉街に、発電機などの研究開発のため訪れるメーカーや大学関係者が相次いでいる。豊富な湯量や、観光地ならではのおもてなしも好評のようだ。地元も、小浜での実験を外部に積極的に働き掛けることを検討している。

小浜温泉でわき出る湯は1日は本年度までに11件。小浜温泉約1万5千ト。そのうち約7割の湯場の湯が浴場などで使われることなく、排水されているとみられている。環境省の実証実験として福岡市のコンサルタント会社が3年前に開所した同発電所は、未利用の湯で温めた媒体の蒸気でタービンを回す「熱交換」方式。その後、設備を洗陽電機(神戸市)が買い取り、昨年9月から売電が始まった。

外部からの研究受け入れ窓口となっている地元の一般社団法人、小浜温泉エネルギーの佐々木裕事務局長によると、開所に合わせて受け入れを始めた研究

大学やメーカー 温泉街のおもてなしも好評

泉がある旅館ゆのかで1月26日、アドバンス理工の五戸成史社長(60)は学識者や専門家らを前に、「現段階ではシステムを安くつくり、フル稼働し、メンテナンス費用を安くしないと事業性が成り立たない」と研究結果を発表。五戸社長は取材に「蒸気と温水を両方使える場所は全国的にも珍しい。源泉の提供など、気持ち良く実験をさせてもらえた」と話した。今回の研究は2月で終わるが、実験に使用した発電機は市が引き取って近くの足湯施設「ほつとふつと105」に移し、発電取り組みの一般へのアピールに活用する予定という。

こうした研究は、まとまった人数が連日滞在するため、地元への経済効果も大きい。小浜温泉観光協会の馬渡謙一会長は「研究者にはニーズがある分野。小浜にしかない特徴として、旅行会社の法人向けメニューに入れてもらうよう働き掛けたい」。佐々木事務局長も「受け入れ態勢をもっとしっかり整え、地熱研究のメッカにしたい」と期待している。(永野孝)